CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.141 January, 2019

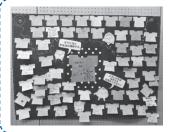
-

《アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ》 2018年度のイベントが全て終了しました。	 〈招聘外国人研究員との研究交流 報告〉 Occupation Literature: Tokyo in the American Imagination ヴィクトリア大学ウェリントン Dougal McNeill6 拡大研究会報告 〈サイバーパンクの東京再訪 一科学小説の環太平洋的想像力〉 文学部教授 遠藤 不比人	
ラテンの調べ」 文学部教授 細谷 広美	理工学部教授 齋藤 洋司8	
〈海外出張報告〉	《CAPS叢書出版予定のお知らせ》9	
研究プロジェクト	〈CAPS活動報告〉9	
「越境的建設労働市場をめぐる日越比3カ国を事例とした 比較分析」フィリピン調査報告		
CAPS主任研究員 惠羅 さとみ5		

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

2018年度のイベントが全て終了しました。

12月はアジアと労働を共通テーマに、4日(火)、6日(木)、15日(土)の3日に渡り、ドキュメンタリー連続上映会「グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズ」を開催いたしました。22日(土)には公開シンポジウム「人口減少社会と外国人労働者—日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える」を開催いたしました。いずれも盛況のうちに、多くの参加者の方々と研究・交流を深めることが出来ました。次号に、詳しい報告を掲載する予定です。



ドキュメンタリー連続上 映会では、作品を観た皆 さまにコメントをご記入 いただき、会場に設置し た掲示版を通じて感想・ 意見を共有させていただ きました。



合わせて、3月20日まで「アジア太平洋研究センター&情報図書館コラボ展示一グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズ」を、情報図書館2階アトリウムで開催中です。



公開シンポジウム「人口減少社会と外国人労働者―日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える」には、149名の方々にご参加頂きました。昨年12月8日可決された改正入管法をめぐって注目されている外国人労働者受け入れ拡大に対する社会的な関心の高さを感じました。

CAPS主催企画の報告

書評会 池宮城 陽子著『沖縄米軍基地と日米安保—基地固定化の起源 1945 - 1953』 法学政治学研究科 2 年 吉河 孝幸

昨今、普天間基地の返還問題が混迷を極める中、沖縄に重くのしかかる基地負担の軽減を早急に実現することが求められている。その実現のためには、沖縄県民のみならず、日本国民全員がこの問題に真摯に向き合い、知見を広げる必要性があるように思われる。そして、本書が、1945年から1953年の日米交渉を分析する中で、この沖縄米軍基地問題の原点を探り、現在まで基地が長期化・固定化してしまったその原因を私たちに示してくれる貴重な著書であるように思う。

2018年9月27日、CAPS主催の下、著者である 池宮城陽子氏(CAPSポスト・ドクター)、評者と して、佐々木卓也氏(立教大学法学部教授)、井上 正也氏(法学部教授)をお迎えし、本書の書評会が 催された。

最初に登壇なさった佐々木氏は、そのご報告の 中で、本書の意義について、それまでの研究がア メリカ側の政策を重視したものであったのに対し、 本書では日本政府の政策を重視し、批判した点を 挙げた。その上で、佐々木氏は、ご専門であるア メリカ外交史の立場から、いくつかの指摘を行う。 まず、アメリカがアジア・太平洋地域の安全保障 を考えていたことや沖縄米軍基地に対するアメリ カ軍部の論理も大きく影響していたことを挙げ、 日米安保関係のみから読み解くことの限界を指摘 する。また、アメリカが相互防衛条約を結ぶ前提 として、「自助」と「相互援助」を必須としており、 その点で、果たして51年の段階でアメリカが日本 に本当にそれらを求めていたかは不明確であると 指摘した。そして最後に川名晋史氏の『基地の政治 学―戦後米軍の海外基地拡大政策の起源』からの引 用を紹介しつつ、今後、沖縄の米軍基地問題を国 際的な視野から見る必要性を述べた。

次に登壇なさった井上氏は、本書の意義について、本書が当事者である日米さえ意識していない、いわば潜在的な思考の中にある「論理」が一貫して存在していたとしている点を挙げ、そしてその「論理」を証明するための根拠を本文で紹介していることから、外交史の著書でありながら、その趣が異

なとる井の観つうの歩れは軍るを、上日点か。再とたあのが介のも外ら指ず備て察まりを、摘、の組予でのるてで専史いを日第織備警ま割のので、門のく行本一さ隊察を



池宮城 陽子 氏(登壇者)

期待されており、決して沖縄の防衛までをまかなえる存在ではなく、その点で1952年の講和条約発効の時点で果たしてこの「論理」が存在していたのかは不明確であると指摘する。また、"Residual sovereignty"の訳語として交渉の当事者であった西村熊雄は「潜在主権」を充てているが、国際法の議論では「残存主権」が充てられており、この言葉のニュアンスの違いが実はイメージ工作に用いられていたのではないかという点も指摘した。

以上の両氏のご報告を受け、池宮城氏による非常に丁寧なリプライと、改めて自身の考える「論理」についての補足が行われた。その中で、この「論理」は、1951年の日米交渉で当事者が将来的にこうなればよいと考えていたもの、いわばそれぞれの未来予想図であるとする。そして、結果的に、その未来予想図通りにはいかなかった訳だが、そうなることも実は両者ともに考えていなかったのではないかと述べた。

池宮城氏のリプライの後の質疑応答でも、登壇者へさまざまな分野から数多くの質問が寄せられ、 非常に白熱した議論が交わされた。改めてこの沖縄米軍基地問題に関する関心の高さを実感させられた。それとともに、筆者が教育者の端くれであることもあり、次の世代にどうこの沖縄の抱える問題を自分たちの問題でもあると認識させるかを考えなければならないと感じた。

公開シンポジウム「ポスト冷戦と平成デモクラシーの日本政治」

法学部政治学科 4 年 須藤 裕貴

2018年10月6日(土)にCAPS主催の公開シンポ ジウム「ポスト冷戦と平成デモクラシーの日本政 治」が行われた。会場は6号館501教室で、地域住 民など162人が参加した。

司会に高安健将氏 (CAPS所長・法学部教授)、 登壇者に清水真人氏 (日本経済新聞編集委員)、宮 城大蔵氏(上智大学総合グローバル学部教授)を迎 えた。

最初に高安氏からシンポジウムのテーマについ て紹介があった。それによると今は一つのターニ

ングポイントにある という。冷戦終結か ら30年経過し、国 内の政治改革から四 半世紀が経ってい る。そして、平成と いう時代が終わろう としている。その時 代の節目にそれらを 統括し、検討する機 会を設けたいという



考えから今回のシンポジウム開催に至ったという。 その上で、冷戦の意味やポスト冷戦という新たな 時代の動き、時を同じく変化していく国内政治に ついて簡単に振り返った。

次に清水氏が登壇した。この冷戦後30年は制 度が政治に大きな影響を与えた時代であったとい う。世界では冷戦終結や湾岸戦争、国内ではバブ ル崩壊や政治腐敗などがある中で改革の動きにつ ながっていった。一つは中選挙区制から小選挙区 制への改革。もう一つは中央省庁再編などの政府 改革だ。それは政治に大きな影響を与え、政権交 代や派閥政治の瓦解、強い首相の登場をもたらし た。安倍首相はこの変化を活かし、強力な基盤を 得ているという。この政治改革はコンセンサス型 から多数決型に変化をもたらし、憲法改正に匹敵 するほどのインパクトがあったと指摘した。その 上で、強い首相が好ましいかは議論が分かれるが、 現在の制度でも多くの課題があり、解決していく 必要がある。今や複雑化する問題の前では簡潔な 答えはなく、選択肢は不明瞭なものになっている。

消極的ながら、与党が悪いから野党にするという 割り切りが重要だ。清水氏はこうした問題を考え るには30年では足りず、40年という長いスパンで 考えていかなければ見えてこないものがあり、こ れからも考え続けていきたいと述べた。

次に宮城氏が登壇し、日本外交について国際政 治と国内政治の連関という側面から講演をした。 戦後の日本の外交は安全保障の法律的解釈と戦後 処理という二つの面から始まった。当時の外交は 条約や法律の解釈という受動的なものであった。



左:清水 真人 氏 右:宮城 大蔵 氏

しかし、冷戦終結や 湾岸戦争などがある 中で旧来の外交が不 全に陥り、新しい体 制が必要になったと 指摘した。このよう に日本の外交は常に 安全保障とともに変 化してきた。それは 国内政治にも大きく 関係し、国内政治に

おける極めて重要な争点となってきた。宮城氏は まとめとして、これからの日本には旧来の非欧米 唯一の一等国、世界2位の経済大国に変わる新た なアイデンティティが求められている。このアイ デンティティが政治、そして外交の方向性を決め ていくことになるのではないかと述べた。

最後には質疑応答が行われ、参加者から政権交 代や安全保障問題などについての質問が寄せられ、 登壇者がそれぞれに回答していった。こうして、3 時間近くに及ぶシンポジウムは盛況のうちに終了 した。シンポジウムは来年で平成が終わるという 時期に、平成時代を振り返る非常に意義深いもの となった。特に清水氏の「平成の30年は分析の枠 組みとしては短い。40年は必要だ」という言葉が 印象深かった。また、平成はさまざまな変化があっ たことがわかった。それに続く、新しい元号の下 では政治や社会がどのように変化していくのか、 とても楽しみに思えるようなシンポジウムとなっ たと思う。

ラテンアメリカ音楽レクチャー・コンサート

「オマール・アコスタ・デュオ フルートが奏でるラテンの調べ」

文学部教授 細谷 広美

11月2日(金)の夕刻、成蹊学園本館大講堂でオマール・アコスタ・デュオと、文化人類学者の石橋純東京大学教授(成蹊大学非常勤講師)によるレクチャー・コンサート「フルートが奏でるラテンの調べ」が開催された。

オマールさんは南米ベネズエラ出身のフルート奏者で、日本でも人気が高いチェロの名手ヨーヨー・マや世界三大テノールのプラシド・ドミンゴとも共演してきている。アルゼンチン出身のギタリスト兼チェリストのセルヒオ・メネンさんとともに、スペイン国立バレエ団のオーケストラメンバーとして来日したのにあわせて今回のコンサートが実現した。事前申し込み制の300名の定員はすぐに満員御礼となり、関心の高さがうかがえた。当日は大講堂の重厚な趣ある空間に美しく心躍る音色が響きわたった。

コンサートではラテンアメリカ音楽に関する 数々の御著書がある石橋先生によるユーモアを交 えた案内のもと、アンコールを含め全10曲が演 奏された。日本ではトリオ・ロス・パンチョス の演奏でおなじみのメキシコのボレロ「ベサメ・ ムーチョ」(スペイン語で「いっぱいキスして」とい う意味で情熱的な歌詞を日本語に訳すのは少し難 しい)。現代タンゴの鬼才アストル・ピアソラの Bordel190。タンゴの往年の名歌手カルロス・ガ ルデルの曲で、スペインのペドロ・アルモドバル 監督映画でも知られる「ボルベール(帰郷)」。初演 となったペルーの国民的曲「ニッキの花(フロール・ デ・カネーラ)」(詳しくは拙編著『ペルーを知るた めの66章』)。オマールさんの故郷のベネズエラの 曲。オマールさんが愛犬リリーや末娘のルシアちゃ んに捧げたオリジナル曲も演奏された。

ちなみにラテンアメリカでは、女の子の15歳の 誕生日を盛大に祝い父と娘がワルツを踊るという 習慣がある。おしとやかな女性を想像させる「ルシ アのワルツ」だが、小学生となったルシアちゃんは お転婆で機知に富む女の子に育っているので作曲 し直さなければ、と愛情のこもったエピソードが 伝えられた。最後は東京大学大学院生の韓智仁さ んによるベネズエラの伝統的弦楽器クアトロと、 東京藝術大学大学院生の牧野翔さんによるマラカ スも加わった楽しい演奏となり、会場全体が熱気 に包まれたまま終演した。

弦楽器や打楽器、伝統的楽器で演奏されることの多いラテンアメリカ音楽だが、クラシック、フラメンコ、ポピュラー音楽を自由自在に行き来し、しかもフルートの曲にしてしまうオマールさんの、凄さを感じさせない凄さを目の当たりにした。オマールさんは「エル・システマ」の出身という紹介があったが、「エル・システマ」は、ベネズエラの経済学者兼音楽家のホセ・アントニオ・アブレウ博士によって創設されている。子供たちに貧富の差に関係なく音楽を学ぶ機会を提供し、麻薬や犯罪に巻き込まれることなく夢や希望をもつ手助けをする運動としてはじまった。運動は現在世界各地に広がり、日本でも東日本大震災後に福島県相馬地域の子どもたちによる「相馬子どもオーケストラ」が結成されている。

最後に本館大講堂でのコンサートは、7月に文学部主催で行ったレクチャー・コンサート「アンデス音楽の伝統と前衛」に続く試みであり、企画を下さった石橋先生、学生たち、アジア太平洋研究センターの皆様の多大なご尽力の下実現に至ったことを記して感謝の念を表したい。



左:セルヒオ・メネン氏 右:オマール・アコスタ氏

海外出張報告

研究プロジェクト「越境的建設労働市場をめぐる日越比3カ国を事例とした比較分析」 フィリピン調査報告

CAPS 主任研究員 惠羅 さとみ

2018年8月、日本への技能実習生の送り出し地域に関する調査を実施するために、フィリピンのネグロス島およびマニラを訪問した。今回初めてフィリピンを調査対象としたのは、これまで調査してきた新興送り出し国ベトナムと比べると、建設技能実習生の送り出しの経験が25年以上蓄積されているため、比較的長いスパンで移動をめぐる経緯と影響を捉えることが可能であると考えたからだ。

8月24日朝に成田を出発し、マニラでトランジットして同日夕方にネグロス島のバコロドに到着した。既に陽が陰っていたため、初日の車移動は真っ暗なサトウキビ畑の中をひたすら進む。ネグロス島では、かつての植民地政策の影響で現在でも大規模プランテーションのモノカルチャー経済が広がり主要産業は農業と漁業だ。それでも近年のグローバル化の影響が表れているのが、島に6カ所あるコールセンターと開発が相次ぐ巨大ショッピングモールの存在であった。その日の夜の会食では、調査の調整を依頼した送り出し機関の代表にインタビューを実施し、二日間の調査日程の打ち合わせをした。

8月25日午前はまず送り出し機関の日本語学校 を訪問し、約80名の実習候補生に調査票を配布し てその場で記入してもらいながら、時間の許す限 り個別インタビューを実施した。午後は、実習生 の実家を訪問する。典型的な出自層を紹介しても らい、サトウキビ畑の真ん中にある5~6世帯程 の集落に向かった。とても子供が多いことにまず 驚く。フィリピンの人口の平均年齢は23歳である。 訪問した一つの世帯では8人兄弟の長男が既に日 本に渡航し、次男が日本へ渡航する予定であった。 その隣家の実習生の家屋は日本滞在中に台風で倒 壊し、その横に毎月の送金でブロックを購入しな がら兄弟の手で新しい家を建てている途中であっ た。集落を後にし、街道沿いの建設資材業を起業 した元実習生のビジネス兼カフェに立ち寄りイン タビューを行う。横を偶然、乗り合いのトライシ クルで日本語学校から帰る実習候補生たちが手を 振って帰路についていった。夕方過ぎ、送り出し 機関に戻り、業務一連の動画・写真を交えた概説を受けながらの会食、二国間関係や人の信頼構築、 実習生とその家族の気持ち、日本の建設産業が抱える構造的問題にも話が及び、熱を帯びた談話と なった。

8月26日は現地での雇用機会の創出を目指す関連建設会社の事務所で代表にインタビューを実施し、送り出し地域の雇用消費構造について話を聞いた後、実際に建設OJT現場を視察し、市場や巨大ショッピングモールに立ち寄った。

8月27日午前はマニラへ移動、ネグロス島とは対照的な都市部の高層建築を眺め観ながら、午後は帰国した技能実習生が下請の職長として働く複合開発ビル群の建設現場を視察する。8月28日は終日、多業種向けに送り出し数を急拡大している日本向けの送り出し機関を訪問し、日本人の代表と日本語教師、フィリピン人の校長などにインタビューを実施するとともに、修了式に立ち会う。調査最終日である8月29日はフィリピン大学ディリマン校アジアンセンターを訪問し、Jocelyn Celero助教授と懇親を兼ねての昼食、両国における研究状況と共同研究の可能性などについて意見交換をして、翌8月30日に帰途に就いた。

今回は筆者の初のフィリピン渡航だったこともあり、見聞きすることすべてが新たな知見であった。送り出しの構造や、農村と都市の違い、国の制度政策に対する現地の実態などについて、今後も、比較研究を念頭に複数の地域でフィールド調査を重ねていく予定である。



実習生送り出し地方の島全土に広がるサトウキビ畑

招聘外国人研究員との研究交流 報告

Occupation Literature: Tokyo in the American Imagination

Dougal McNeill, Victoria University of Wellington

The Centre for Asian and Pacific Studies (CAPS) at Seikei University gave me the two most precious of scholarly gifts: time to think and space to write. I am most grateful to everyone associated with the Centre for the warm welcome and friendly hospitality I have enjoyed during my stay. The Centre has been a wonderful, collegial place in which to read and reflect on the ways Tokyo has been textualized, imagined, and brought to narrative life in Anglophone literatures.

My project reads Tokyo in English-language literature as an occupation city. This city has a peculiar relationship with American culture, standing in as a symbol of both the future itself - all those towering skyscrapers and neon lights in cyberpunk - and as a place where the past is preserved and contained, a past evoked by the familiar signifiers of 'Japan-ness' in Edo-era samurai swords, kimono, and cherry blossoms. Tokyo is both intimate and distant; a place marked out as symbolizing Otherness and, through the continuous American military presence now for over seventy years, a familiar and thoroughly Americanized space. I want to explore how literature makes this space imaginable in English. My concern, then, is not so much with representations of Tokyo, as if these can be checked against a 'real' city and found successful or wanting by the critic, but rather with how Tokyo has been textualized, how it has been rendered in English-language texts; how it has been evoked, described, made thinkable and, indeed, able to be occupied by the American mind.

The first part of my project involves reading Tokyo in cyberpunk, the representative form of those years of 'Japan bashing' during the trade wars and dilemmas of the American 1980s. Professor Endo reports elsewhere in this issue on the most stimulating seminar CAPS held with Professor Takayuki Tatsumi from Keio University and Brian White from the University of Chicago. I should like here to add my thanks

to Professor Endo and to Professor Kensuke Takayasu for their generosity in bring together such a lively event. Comments by CAPS staff and the other participants during this exchange led me to revise and develop some of my initial arguments, and I am grateful to everyone who attended and offered feedback.

Another part of my project will read Japanese-American and Japanese-Canadian writers to track their changing responses to, and evocations of, Tokyo in changing North American cultural contexts. One of the pleasures of Tokyo's unseasonably warm autumn last year was the chance I had to read Japanese-American poetry in Seikei's beautiful grounds beneath red autumn leaves.

That warm weather gave me the chance also to practice what some, following the Situationists, have called psychogeography. I am writing a book about Tokyo, so wanted the chance to learn Tokyo physically and by the senses – smell, sight, hearing, touch – as well as through literature. During my time here I have walked the Yamanote Line and walked following the Inokashira Line from Kichijoji to Shibuya.

I have accumulated many debts during this trip thanks to the kindness of all my colleagues. I wish in particular to thank Noriko Nagahashi for her help with every aspect of my stay, Professor Kensuke Takayasu for hosting me, and Professor Fuhito Endo for his energetic and unflappable encouragement of me in what has seemed, at times, like an odd departure from my more familiar Modernist territory. I hope to be able to

visit again, and to further our Asia-Pacific scholarly connections.



大学キャンパスにて

拡大研究会報告〈Cyberpunk Tokyo Revisited: The Transpacific Imaginings of Science Fiction サイバーパンクの東京再訪─科学小説の環太平洋的想像力〉 文学部教授 遠藤 不比人

CAPS主催、2018年度招聘外国人研究員による 拡大研究会の一環として、11月30日金曜日、午 後2時から6時まで、大学10号館2階中会議室に て、ワークショップ「Cyberpunk Tokyo Revisited: The Transpacific Imaginings of Science Fiction (邦題「サイバーパンク東京再訪-科学小説の環太 平洋的想像力」)が行われた。当該招聘外国人研究 員は、ドゥーガル・マクニール(ヴィクトリア大学 ウェリントン)であり、彼が現在(2018年12月時 点) CAPSにて従事している研究テーマが、まさ に「サイバーパンク東京」をめぐるものである。「サ イバーパンク」とは、1980年代に流行したサイエ ンス・フィクションのサブジャンルを意味し、し ばしば人体と機械との融合、破滅後の世界におけ る反体制的な政治的身振りを特徴とする。これが 流行した80年代、東京(Tokyo)が米国の複数のSF 作家の霊感源となり、複数の作品が生み出された。 まさに「サイバーパンク東京」が、「環太平洋的」な 次元で、文学(SF)的想像力を刺激したことになる。 この歴史的分脈は、世界第2位の経済大国として、 米国に対し圧倒的な存在感(圧力)を示した日本(東 京)ということであり、現在ではその地位を日本が 失ってしまったことに一抹の寂寥感を否めないと 言えば、報告者の主観に過ぎるだろうか。

講師は、当該分野に関する決定的に重要な著作であるFull Metal Apache: Transactions Between Cyberpunk Japan and Avant-Pop America (Duke University Press, 2006)の著者である巽孝之氏(慶応義塾大学)、巽氏の指導を受けこの分野で博士論文を執筆中のブライアン・ホワイト氏(シカゴ大学

院生)、それにマクニール氏 が加わり、全体の司会を遠 藤が務めた。

巽氏は、"Transpacific Cyberpunk: Transgeneric Interactions Between Prose, Cinema and Manga" というテーマから、大友克 洋『AKIRA』(1982-90)のア ニメ版と映画版、米国のサ イバーパンクを代表するウィリアム・ギブソン、さらに赤瀬川原平の「超芸術」論にまで論究する広範な視点を提供するものであった。マクニール氏は、"Tokyo after Cyberpunk"と題された議論を展開しながら、1980年代に経済において日本に凌駕された米国が、東京に己が将来をSF的に投影する文学的想像力を、北米のマルクス主義的文学理論家フレドリック・ジェイムソンの概念などを援用しながら分析した。ホワイト氏の発表は、その題目"From Cyberspace to Textspace: Digital Landscapes in Tobi Hirotaka"が示すように、日本のSF作家飛浩隆(1960-)のサイバーパンク的なテーマが、非常に特異なテクスト性を帯びる次第と詳細を、自ら日本語テクストを英訳し、両者を比較検討しながら論じるものであった。

聴衆として、文学部下河辺美知子教授、同じく文学部バーナビ・ラルフ准教授、また文学研究科英米文学専攻の院生などが複数参加し、活発な議論がなされた。今現在から振り返ってみれば、この80年代のSF的想像力において「破滅apocalypse」がしばしば含意されることは、2020年の東京五輪後の経済危機、あるいは地震などの大震災が危惧される21世紀の東京をめぐって、むしろ不気味な予言的響きを帯びているのかもしれない。末筆ながら、CAPS所長である高安健将法学部教授がご臨席くださったことを付言する。また、このワークショップの準備と実施にあたって、CAPSの事務職員と研究員の方々から多大な援助を受けた。この場を借りて、CAPSの所長とスタッフに謝意を表明したい。







左: 異孝之氏 中: ブライアン・ホワイト氏

右:ドゥーガル・マクニール 氏

シリーズ 本を読む

安田陽著『送電線は行列のできるガラガラのそば屋さん?』(インプレスR&D社、2018年) 理工学部教授 齋藤 洋司

2018年の夏は記録的な猛暑となった。一方では、深刻な豪雨災害も頻繁に発生している。近年のニュースで、「数十年に一度の大雨」や「観測史上初めて」などのフレーズを毎年のように聞くのは気のせいではない。これらは日本だけの現象ではなく、地球温暖化の影響であり、これからも繰り返す可能性が高い。地球温暖化の原因については、全てが人類による CO_2 排出のせいとは言えないものの、無関係とも考えにくい。

一方、経済産業省によると、20%程度あった日 本のエネルギー自給率は、2011年の原発事故によ り急減し6%、若干回復した2016年でも8.3%と 厳しい状況であり、稼いだ外貨の2割以上も化石 燃料代に費やしてしまっている。現在の生活水準 を維持するためには、資源の少ない日本として将 来に向けて改善すべき問題である。環境問題を含 めこれらの解決策として期待されるのが、太陽光・ 風力などの再生可能エネルギーの活用である。そ こで日本でも欧州に倣って再生エネルギー固定価 格買取制度が実施され、太陽光・風力発電がある 程度普及し、実際、上記のエネルギー自給率の改 善に寄与した。さらに本年7月、政府により発表 された第5次エネルギー基本計画には、初めて「再 生可能エネルギーの主力電源化」を目指すことが明 記された。

しかし、最近になって、日本において再生可能 エネルギーの伸びが鈍化している。その原因の一 つが、送電に関わる制限である。送電線は基本的 に既存電力会社が所有し、運用している。風力発 電設備が多い特に東北・北海道において、送電線 の空き容量がないとして接続を制限しており、参 入障壁となっている。ほとんどの既存電力会社は 原子力発電所を所有しており、その存在意義を脅 かす再生可能エネルギーの導入には慎重である。 そこで、本当に「送電線の容量が足りない」のかと 言う疑問が生じる。

怪しげなタイトルではあるが、本書はこの問題 を論じる代表的な入門的書籍である。著者によれ ば、例えば東北電力管内において「空き容量なし」



とされた送電線を調べると、実際には利用率はわずか10%程度であったとして問題提起している。だからと言って、電力会社を糾弾しているわけではなく、用語の定義から詳しく説明し、電力会社が主張する理由など、データに基づき淡々と問題点を解説している。しかしながら、残念なことに用いた全てのデータは電力会社が公表しているものに限られるため、断定的な表現にはなっていない。先ずは電力会社には一層のデータ開示を求め、国が解決策を講じるべきと結論している。

太陽光・風力は発電電力の変動が大きいデメリットがあり、また、業者任せにすると無秩序な開発によりかえって環境破壊を引き起こす例もあり、無制限な導入には問題がある。今後、国が主導となって適切なルールを定め、エネルギー自給率の向上、環境問題の解決につながることを願っている。

CAPS叢書出版予定のお知らせ

細谷広美、佐藤義明編著

『グローバル化する⟨正義⟩の人類学─国際社会における法形成とローカリティ』

(2019年 昭和堂 本体 5,400 円+税、ISBN 9784812218044)

本書は2015年度~2017年度に実施したプロジェクト「グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ:グローバルとローカルの出会う現場から」(責任者細谷広美、サブ責任者佐藤義明)の成果出版である。「国際社会は国家を基本単位としてきたが、グローバル化はこのような国際社会に質的変容をもたらしてきた。また、「他者」の存在は法の境界を揺るがせてきた。本書は、人類学者を中心に、国際法、政治学、歴史学、社会学の専門家が集まり、学際的議論をすることで、グローバル化の進展にともない国際社会において共通の規範としての正義(ジャスティス)が形成されるプロセスとそのダイナミズムを、ローカリティとの関係性という具体的なコンテクストから、法との関係を中心に検討することを目指す。」(本文より抜粋)

目次

- 序 章 グローバル化する正義とローカリティ―正義の規範化と法 細谷広美
- 第 I 部 グローバル化と移行期正義
 - 第1章 グローバル化する移行期正義と先住民―ローカリティを代表/代弁するのは誰か?細谷広美
 - 第2章 真実と正義を求めるグローバルな動き―アルゼンチンの経験と国際社会の変化 杉山知子
 - 第3章 和解と忘却―ソロモン諸島における真実和解委員会の活動が意味するもの 関根久雄
 - 第4章 アムネスティの国際法上の意義と限界 洪恵子
- 第Ⅱ部 正義と法のインターフェイス
 - 第5章 国家の開発促進と先住民の権利—マプチェの自決権要求とチリ政府の緊張関係 ジャンヌ・シモン&クラウディオ・ゴンサレス
 - 第6章 ジャスティスの追求とヒュブリス―コソボの「独立」は正義を実現したか? 佐藤義明
 - 第7章 性暴力と裁判―フィリピン戦が伝えるもの 岡田泰平
- 第Ⅲ部 人類学の現場から
 - 第8章 国家を代替する社会―東アフリカ遊牧社会におけるローカル・インジャスティス 湖中真哉
 - 第9章 待つことを知る社会の正義—東アフリカ民族誌からのオルタナティブ・ジャスティス論 石田慎一郎
 - 第10章 福祉国家における難民の再統合—ビルマ(ミャンマー)難民のフィンランドへの第三国定住 久保忠行
- 第11章 宗教と「正義」—ミャンマーにおける仏教徒女性婚姻法制定をめぐって 土佐桂子おわりに

CAPS活動報告(2018.9.16~2018.12.15)

1. 公開講演会、研究会等

~書評会~

開催日	9月27日(木)
	沖縄米軍基地と日米安保―基地固定化の 起源1945-1953―
登壇者	佐々木 卓也 (立教大学法学部教授)、井上 正也 (法学部教授)、池宮城 陽子 (CAPS ポスト・ドクター)
参加人数	21名

~公開シンポジウム~

開催日	10月6日(土)
タイトル	ポスト冷戦と平成デモクラシーの日本政治
登壇者	清水 真人 (日本経済新聞編集委員)、宮城 大蔵 (上智大学総合グローバル学部教授)、 高安 健将(CAPS所長・法学部教授)
参加人数	162名

~ラテンアメリカ音楽レクチャー・コンサート~

	11月2日(金)
タイトル	オマール・アコスタ・デュオ フルート が奏でるラテンの調べ
出演者	フルート:オマール・アコスタ ギター :セルヒオ・メネン レクチャー:石橋 純(東京大学教養学部 教授・文学部非常勤講師)
参加人数	211名

~ドキュメンタリー連続上映会~ ―グローバルに連鎖する労働とアジアシリーズ― 〈学生向け〉

(十二回)//	
開催日	12月4日(火)
タイトル	『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』
参加人数	12名
開催日	12月6日(木)
タイトル	『危路工団』
参加人数	4名

〈一般・学生向け〉

· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
開催日	12月15日(土)
タイトル	『ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償』、『危路工団』
ゲストトーク	伊藤 和子 (弁護士・国際人権 NGO ヒューマンライツ・ナウ事務局長・『ファストファッションはなぜ安い』著者)
参加人数	149名

~招聘外国人研究員による拡大研究会~

開催日	11月30日(金)
タイトル	Cyberpunk Tokyo Revisited: The Transpacific Imaginings of Science Fiction サイバーパンクの東京再訪―科学小説の環太平洋的想像力
講演者	異 孝之(慶應義塾大学教授)、ブライアン・ホワイト(シカゴ大学大学院生)、ドゥーガル・マクニール(招聘外国人研究員・ヴィクトリア大学ウェリントン上級講師)
参加人数	19名

2.研究出張

~海外出張~

期間	10月19日(金) ~ 10月26日(金)
プロジェクト名	アジア太平洋地域における情動メディア としての西洋音楽の影響
出張者	
行 先	日本
目 的	プロジェクト研究会出席・資料収集

~国内出	~国内出張~	
期間	9月21日(金) ~ 9月24日(月)	
プロジェクト名	ミトコンドリア DNA 解析を基軸にしたヤマビルの進化学的研究	
出張者	佐藤 尚衛(成蹊中学校教諭)	
行 先	鹿児島県	
目 的	屋久島ニホンヤマビル調査	
期間	9月26日(水) ~9月27日(木)	
プロジェクト名	消費者行動における無意識と潜在意識の探求	
出張者	井上 淳子(経済学部教授)	
行 先	宮城県	
目 的	日本心理学会参加	
期間	10月12日(金) ~ 10月14日(日)	
プロジェクト名	消費者行動における無意識と潜在意識の探求	
出張者	井上 淳子(経済学部教授)	
行 先	愛知県	
目 的	日本広告学会 第49回全国大会出席	
期間	10月26日(金) ~ 10月28日(日)	
プロジェクト名	消費者行動における無意識と潜在意識の探求	
出張者	井上 淳子(経済学部教授)	
行 先	京都府	
目 的	日本消費者行動研究学会消費者行動研究 カンファレンス出席	
期間	11月12日(月) ~ 11月14日(水)	
プロジェクト名	消費者行動における無意識と潜在意識の探求	
出張者	有賀 敦紀(広島大学大学院総合科学研究 科准教授)	
行 先	成蹊大学	
目 的	プロジェクト研究会出席	

3.会議の記録

開催日	9月25日(火)
会議名	所員会議
開催日	9月26日(水)
会議名	運営委員会
開催日	10月9日(火) ~ 16日(火)
会議名	臨時(メール)所員会議・運営委員会

CAPS Newsletter No.141

2019年1月15日発行

編集発行:成蹊大学アジア太平洋研究センター 〒 180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1

> 0422-37-3549 (ダイヤルイン) **7**

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp Web: https://www.seikei.ac.jp/university/caps/